

但馬北東部地方方言の抑揚生活 —「あと上がり」A型文アクセントについて—

今 石 元 久

兵庫県但馬北部の出石郡但東町に^{シボ}資母と呼ばれている一地区がある。(明石市の真北に位置している。)当該地区は、日本海にそそぐ円山川の一支流出石川の上流にあり、四囲が丹後山地などで囲まれ、その分水嶺をもって京都府の丹後・丹波と接している。

当該地区での文アクセントの高低波動体を把握して、方言の抑揚生活の一つの精査研究につくことが私の発表の肝要な点である。

調査は、1973年3月～8月まで、のべ10日のうちに全17集落中、比較的大きい10集落でおこなってきた。対象者は老、中、青、少の全年層の中から選んで、土地の生年者・外住経験のない人を求めた。調査の手法は、自然傍受法と録音収録法とである。

当該地区で得られた資料を、文の後方に注意しながらアクセント高低の類別をおこなうとき、まず、文後方あたりで一音節だけおし高められる類型が帰納される。これを「あと上がり」A型とする。文後方でもとくに末端の一音節がおし高められる類型が帰納される。これを「あと上がり」B型とする。さらに、文後方でも末端直前で一音節がおし高められ、かつ急激な下降をえがく類型が帰納される。これを「あと上がり」C型とする。文後方で一音節がおし高められて、かつゆるった調子の上昇をえがく類型が帰納される。これを「あと上がり」D型とする。当該地区の文後方のアクセント高低の類型のうち、主要な類型は以上である。

なканずく、有力な「あと上がり」A型を中心にしてみたとき、大きくは二つの問題が所在しているようである。

一つ、「あと上がり」A型の単立形態では、たとえば、○バンナリマシタ。(老女→老女)や○マ一、スンマセンデシタ。(中女→中女)など、挨拶の文、諸多の文の高低ひと波が文後方で、しかも敬語部分の一音節だけ高起卓立することにおいて、一文の統一は、いっそう鮮明になる。そしてそのさいは、卓立音と待遇意識など、地方人の気もちとが、いかに深くかわるのか、大きい問題である。

二つ、「あと上がり」A型の同型および他型との連立形態では、(1)「あと上がり」A型+A型 ○ゴクローサンデシタ。(中女たち→初老女)、(2)「あと上がり」A型+B型 ○マドロシテ。(古老女→私)、(3)「あと上がり」A型+C型 ○キテ オクレマシタジ。(老女→私)、(4)「あと上

り」A型＋D型　○シンモキヤシ　ネーエ[↑]。(青女→私)など、卓立者の、述部や文末部へ高低波動の収約化する動向が見定められる。ここには、国語表現の本然(つまりは、文末決定の理)にかかわり深い問題がある。